

生徒の前で被爆体験を話す広中さん



次世代平和への願い新た

原爆に奪われた父

世羅中生徒ら  
76年前に思い

世羅町寺町の世羅中は6日、被爆者の広中正樹さん(81)＝福山市手城町＝の講演会を世羅町のせら文化センターで開いた。1～3年の生徒169人は、爆心地

近くで被爆して翌日亡くなった広中さんの父親の最期などを聞き、平和の大切さを実感していた。

広中さんは当時5歳で爆心地から約3・5キロの自宅そばで被爆。爆心地近くの電車内で被爆した父の一瞬間(37)は全身にやけどを負い、翌7日に亡くなった。広中さんが「背中に刺さったガラスを抜いてくれと言われたが、幼い自分にはできなかった。76年たっても、この話をすると涙が出る」と話すと、生徒はうなずくなどしていた。

その後、3、4人のグループに分かれ、感想を言い合った。3年小西永遠さん(15)は「実際に話を聞くと、想像して感情移入した。もし自分から歳で同じ体験をしたらと思うとつらい」と話した。(矢野匡洋)